

分科会 10

精神家族への暴力から見つめる精神医療と地域支援

蔭山正子（東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野）

小山公一郎（一般企業・当事者）

小山美枝子（母親）

飯塚壽美・岡田久実子・佐藤美樹子・小田嶋眞弓・沼田光子（埼玉県精神障害者家族会連合会）

精神障がい者による暴力犯罪率は、一般集団よりも低い。その暴力は、外で見ず知らずの他人に向かうことは稀で、多くは家族に向かう。本分科会では、精神障がい者から家族に向かう暴力というタブーな話題をあえてオープンに議論し、精神医療や地域支援のあり方を問うことを目的とした。

埼玉県精神障害者家族会連合会会長の飯塚氏が司会進行、岡田氏・佐藤氏・小田嶋氏・沼田氏の協力によって運営された。

1. 当事者、家族、研究者・支援者の立場から発表

①**当事者の立場（小山公一郎）**：強制移送から医療保護入院に至った経緯から母親を恨んだと過去を振り返った。医療者が熱心に説得してくれたことや、自暴自棄になり入退院を繰り返すような人生を送りたくないという強い気持ちが芽生えたことで、自分の弱さや障がいと向き合うようになった。その後、受験勉強を経て志望大学に進学し、就職。自分の将来や夢に目を向け始めたことが人生のターニングポイントになった。

②**母親の立場（小山美枝子）**：長男が発病して、相談機関に行っても何の糸口も得られず、病状が悪化。強制入院しか手立てがなかったことが今でも悔やまれる。

③**研究者・支援者（蔭山正子）**：病状が悪い時や障がい者が重たい時に、暴力は家の中で家族に向きやすい。強制的な移送や入院によって患者は深い傷を負い、家族との関係性が悪化する。入院中に傷ついた体験は、退院後に家庭に持ち込まれ、家族への暴力という形で表出される側面がある。

2. 指定発言

公一郎さんの就職活動を支援した大学の方、現在公一郎さんが働いている企業の方、以前公一郎さんが入院していた頃に支援していた看護師の方の3名に指定発言を依頼した。

大学や企業の方にとって病気は気にならず、公一郎さんの人柄を評価していた。看護師の方は、公一郎さんの回復に驚くとともに、拘束をすることの辛さを話された。

3. 会場からの質問と議論

公一郎さんの体験談が新聞に掲載されたため、体験談を聞くためだけにリカバリーフォーラムに参加したという方が数名いた。

公一郎さんについて、多くの関係者が発言されたことで多角的な理解ができたという感想、精神医療で拘束しないケア方法を模索するべきだという意見などが出された。

《蔭山正子（東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野）》